Title	スピリチュアルケア ： ホスピス医療の現場から
Author(s)	徳田，信
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.3, 2013.3 : 14-15
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4493
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

報　告

スピリチュアルケア：ホスピス医療の現場から

2012年10月19日、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センターにより、講演会「スピリチュアルケア：ホスピス医療の現場から」が開催された。講師は山形謙二氏（神戸アドベンチスト病院院長）で、61名の参加があった。山形氏は、東京大学理学部、米国路マリンダ大学医学部卒。神戸アドベンチスト病院の内科医長を経て、現在同病院の院長。標副学長の開会挨拶と窪寺教授の講師紹介に続き、さっそく講演に入った。以下は、講演内容の概要である。

死を前にして人間の価値を決めるものが態度価値である。そして、この態度価値の実現を援助するのがスピリチュアルケアである。それはまた、スピリチュアルペイン（霊的・実存的苦痛）に対するケアである。苦痛は身体的なものだけでなく、精神的苦痛や社会的苦痛、そしてスピリチュアルな苦痛がある。これらを合わせた全人的苦痛に取り組まなければならない。

スピリチュアルケアという時、普通は宗教や一般的スピリチュアリティを扱う。しかしさらに一般的な哲学的・実存的問題も考慮されるべきである。また、ケアする者の態度として、全身全霊を込めた献身が本来求められている。患者の恐怖、希望、夢などに耳を傾け、患者とその家族の人生のすべての次元、すなわち身体的･情緒的･社会的･スピリチュアル的次元に注意を向けなければならない。

神戸アドベンチスト病院院長　山形謙二先生

以上のことを踏まえ、スピリチュアルケアの課題を、①希望の喪失（失望）、②意味の喪失（虚無感）、③尊厳の喪失（自己卑下）、④関係性の喪失（孤独）という四つの側面から捉えていく。

①希望の喪失（失望）とは、「もう何の将来もなくなってしまった」「良くならないのなら、生きている理由がない」という感覚である。キルケゴールは「死に至る病とは絶望である」と言った。ホスピスにおいて、患者は限られた生を色々な希望に支えられて生きている。大切なことは小さな目標を立ててその実現に向かって歩むことであり、それに向かって歩むことが生きがいになり希望になっていく。「最善を望みつつ、最悪に備えよ」である。

②意味の喪失（虚無感）とは、「何故こんなことが起こるのか、全然意味が分からない」「何故こんなことが起こるのを、神が許されるのか」という感覚である。ニーチェは「苦しみに対して人を憤激させるのは、実は苦しみそのものではなく、むしろ苦しみの無意味さである」と言った。パウル・ティリッヒも、三つの実存的不安として、死の不安と罪の不安に加え、無意味さの不安を挙げている。意味を見いだすことこそ、緩和医療におけるQOL向上に最も関係している。

ヴィクトール・フランクルによると、苦難と死こそが人生に意味を与えるものである（「それでも人生にイエスと言う」）。死や苦難を通し、ひとは人生が一回きりであることを覚え、一瞬一瞬を生きることの重みを覚えることができる。

③尊厳の喪失（自己卑下）も大きなスピリチュアル・ペインの一つである。今までできていたことができなくなることで、自分の価値を見失ってしまう。これは、何ができるかを尺度に人が価値づけられる現代社会の問題である。いかに身体が変わりゆこうとも、医療者･家族･友人にとって、「同じ意味ある存在」であり「かけがえのない存在」であることを、具体的なケアと関わりの中で知る

ことができる、ということが重要である。行為（Doing）ではなく存在（Being）に目を留めなければならない。

④関係性の喪失（孤独）も課題である。エーリッヒ・フロムは「人間の最も深い欲求はその分離を克服し、孤独という牢獄から逃れることである」と述べた。孤独、特に実存的孤独は完全に癒すことができない。しかし、親密さや関係性がその重荷を耐えうるものにするのである。

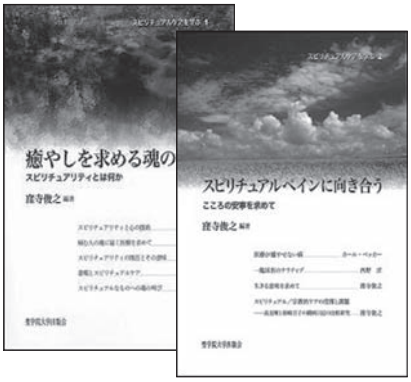
これら四つのスピリチュアルケアの課題と向き合うことで、「新しい人生への目覚め」が起こってくる。気づきの瞬間、すなわち日常の出来事の挫折によって、従来の考えとは違った人生の意味や目的を見いだす瞬間である。死が近づいて現実的なものとなる時、生もまた、より真実で凝縮されたものとなる。また、治って死ぬことはできないが、癒されて死ぬことはできる。癒されるということは、自分自身と他者、自分を取り巻くもの、そして神との正しい関係を回復することである。良い死とは、本人や家族が満足し納得できる死、偶然の産物ではなくみんなで育て創り上げていくものである。

以上が山形氏による講演の概要であり、その後、質疑応答が交わされた。

（とくだまこと　聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

聖学院大学出版会の新刊

スピリチュアルケアを学ぶ　シリーズ



シリーズ１巻
癒やしを求める魂の渇き
窪寺俊之　編著
定価：1,800 円＋税　ISBN978-4-915832-90-1 C0311

シリーズ２巻
スピリチュアルペインに向き合う
窪寺俊之　編著
定価：2,100 円＋税　ISBN978-4-915832-94-9 C0311

刊行予定

2013 年　春刊行予定
シリーズ３巻
スピリチュアルコミュニケーション
―生きる希望と尊厳を支える

2013 年　秋刊行予定
シリーズ第４巻

全国の書店でご注文・お取り寄せいただけます。
amazon.co.jp でもご購入いただけます。

お問い合わせ先
聖学院大学出版会　TEL　048-725-9801

書籍の詳細は大学出版部協会ホームページに掲載されています。ご覧いただければ幸いです。
アドレス　http://www.ajup-net.com/